

存在要求の要求とそれへの応答

——ハイデガー技術論の理解のために¹⁾

君嶋泰明（法政大学）

本論の目的は、ハイデガーが現代技術の本質と呼ぶものが、「存在要求の要求」と私の呼ぶものとして解釈できることを示すことである。典拠としては、主にハイデガーの1953年の講演「技術への問い」（GA7所収）、1935年夏学期講義『形而上学入門』（GA40）、1930年の講演「真理の本質について」（GA9所収）を用いる。

存在要求の要求とは、ハイデガーの技術論の解釈のために私が試みに案出した造語である。それゆえ、ここではまずこの語のいわんとすることについて、あらかじめ説明しておきたい。

たとえば創世記の神は、「光あれ！」とたんに言うことによって、「光」というものを存在させ始めることができた。神には、それまで存在していなかったものを存在させ始める力、いわば存在創始能力があるのである。

一方、人間にそのような能力はない。人間にとって存在者とは、自分の力を出し抜けに存在させ始めることができるようなものではない。私にとって存在者とは、すでに存在しているものの全体の中から、個々に何らかの仕方で現れてくるもの以外の何ものでもないのである。

しかし、人間にはたしかに存在創始能力はないが、存在要求能力ならあるといえる。

たとえば、幼児が食べ物を求めて泣き叫ぶとする。この幼児の叫びは、創世記の神の「光あれ！」に通じるところがある。というのも、どちらも何か——光と食べ物——が望み通りに存在するようになることを求めているのだからである。ただ、神がそのことを存在創始能力でもって実現させるのにたいして、幼児にはそれができないというだけのことである。

したがって、幼児は食べ物が自分のもとに存在するようになることを要求するが、この存在要求そのものは、実際には空転することになる。幼児がいくら泣き叫んでも、もっばらそのことによって、何らかの食べ物が幼児のもとに存在するようになるわけではない。むしろそのようなことがあるとすれば、それは大部分、たとえば母親の仕事による。母親が、たとえば粉ミルクと熱湯を用意し、それを哺乳ビンに入れて混ぜ、人肌になるまで冷ましてから、幼児に哺乳ビンの乳首を含ませる——といった一連の仕事をするからこそ、幼児は食べ物にありつ

¹⁾ 応募時の見通しが甘く、提出した要旨とは若干異なる内容になったことをご容赦いただきたい。なお本発表の未完成の草稿を8月26日のハイデガー研究会例会で検討していただいた。拙い発表にたいして懇切なコメントをしてくださったみなさんに感謝を申し上げます。本稿を仕上げるうえで助けになった。ただしいうまでもなく、本稿に含まれる誤りや行き届かない点の責任はすべて発表者にある。

けるのである²⁾。

他方、幼児は明らかに、存在要求することを自分で選んだわけではない。幼児は、存在要求することへといわば選択の余地なく入り込まされているのであり、だからこそ、空転する存在要求を行いつづける（＝延々と泣き叫ぶ）ほかないのである。では、幼児をしてこのように存在要求させているものとは何か。幼児を逃れがたく存在要求者に行っているものとは何なのか。

上述したように、（存在創始ならぬ）存在要求は、すでに存在しているものの全体の中から、存在者を何らかの仕方で現れさせることでしかありえない。ここでいう「存在しているものの全体」とは、個々の存在者を枚挙していった結果得られる、諸々の存在者ではない。そうではなく、それは個々の存在者の現出よりも前に与えられている、一つの全体としての存在者である。この全体としての存在者が、個々の存在者がそこから現れてくるどころとなるのである。

それゆえすべての存在要求は、この場に向けて投げかけられることになる。そしてこの場こそが、そうした存在要求をさせる当のものである、と考えられる。幼児を存在要求者に行っているのはこの場であり、この場と化している全体としての存在者によって、幼児は、何事についても存在要求するようにさせられているのである。

くだんの存在要求の要求とは、全体としての存在者からのこうした不断の要求のことである。人間は、つねに上述の場から／へと要求されている。以下では、人間をとらえて離さないこのような要求こそが、ハイデガーのいう現代技術の本質、つまり現代技術を存続させている当のものと見なせることを示してゆきたい。

論述の手順は次の通りである。存在要求は、本質上、もっぱらそれ自身によってのみ存在者を現れさせようとする試みであるがゆえに、存在者の即時的現出要求とでも呼ぶのがふさわしい。したがってそれは、幼児に母親の行うような適切なお膳立てなしには空転することになる。第1節では、この空転する存在要求＝即時的現出要求が、(唐突に思われるだろうが) 呪術 (magic) と技術の共通の根と見なせると論じる。そのうえで、第2節では、上に素描した全体としての存在者とその存在要求の要求について詳述し、技術はこの要求を回避せずそれに応じようとする点で呪術とは異なると論じる。第3節では、サヂ・カルノーによる熱の本性

²⁾ 以上の幼児を例とした説明は、マリノフスキーの論文「原始言語における意味の問題」(1923) から着想を得た。たとえば次のような記述を参照。「それゆえ子供にとっては、言葉は表現の手段であるだけでなく、効率よい行為の仕方でもある。人の名前は、哀れな声で叫べば、その人を出現させる力 (power of materializing this person) をもつ。食べ物が必要なときには、食べ物が現れる——たいていの場合は」(Malinowski, 1989, 320)。これはつまり、母親は幼児の叫びを聞けば、幼児が何を必要としているのかたいていの場合は正確に読み取りうる、ということである。なおこの論文については、本論第1節で触れている呪術について調べたさいに、井筒俊彦に教えられた (cf., Izutsu, 2011, 77-8)。

についての考察に依拠しながら、ハイデガーのいう現代技術の本質についての本論の解釈を示す。

1. 呪術と技術の同根性

母親が粉ミルクを用意するまでの間、幼児が泣き叫びながら試みているのは、自分の求めるものを自分の要求そのものによって現れさせること、すなわち存在者の即時的現出要求である。

このことはおそらく幼児の例に限られない。つまりあらゆる存在要求は、本質的に即時的現出要求であると考えられる。H. H. プライスは、『思考と経験』(1953)で、そのことを鮮やかに指摘してみせた³⁾。彼によると、人はしばしば「非経験的思考(non-empirical thinking)」と彼が呼ぶものへと導かれる。非経験的思考とは、経験的事実を度外視して、自分の望み通りに事が運ぶと信じようとする心の動きである。プライスはその例として、気圧・風向き・湿度からしてこれから雨が降るのは明らかなのに、そのことを信じようとしないことや、道路標識からして道を間違えているのは明らかなのに、このまま進めば目的地にたどり着けると自分に言い聞かせるといったことを挙げている。彼はそのうえで、次のように述べている。

[...] これらの事例が示唆しているのは、人間の心にとってこの世界はもしかすると必ずしも居心地のよいものではないのかもしれない、人間の心にもともと備わっているのは、いわば望むものがすべて、それを望んだという事実それ自体によって実現し、すべての命題が、それを考えたという事実のみによって真となるような世界ではないか、ということである。夢の中では、われわれはこれと幾分似た世界を生きることになる。[そこでは] 思考と欲求は感覚によって制御されず、「現実感(sense of reality)」がもはや働かないか、ほとんど働かなくなる。もしかすると、人間の心にとっては、夢を見ることの方が、起きて生活することよりも性に合っているのかもしれない。(Price, 1962, 140)

ここでプライスは、人間の心は、「望むものがすべて、それを望んだという事実それ自体によって実現」することを求めるようにできているのであり、そのような人間の心にとって、この世界は必ずしも居心地のよいものではなく、むしろ夢を見ることの方が性に合っているのではないかと述べている。これは本論の言葉でいけば、人間の心は存在者の即時的現出を求めるようにできている、ということになる。

³⁾ 本論注1で述べたこととともに、このプライスの指摘についても井筒に教えられた(Izutsu, 2011, 5)。

プライスのこの指摘は、基本的には正しいと考えられる。その一つの証拠は、いわゆる呪術の存在である。

上述したように、存在者の即時的現出要求は、適切なお膳立てなしには空転を余儀なくされることになる。プライスの言葉でいいかえれば、それは望み通りにならない現実と「衝突」し、「この衝突によって、私の思考上の操作 [= 即時的現出要求] は、知覚できる世界の中で進展している過程とは別物であることが露呈する」(ibid., 141) ことになる。彼はこの経験を「原初的「否定」(primitive 'not')」(ibid.) の経験と呼んでいる。

一方、異なる文脈ではあるが、かつてマリノフスキーは、ここでいう「否定」の経験に着目し、そこに呪術の「水源 (fountainhead)」(Malinowski, 1992, 82) を見ようとしていた。彼はまず、この「否定」の経験の後に人がしばしばとることになる行動を次のように描写している。

人は、自分の無力にたいして怒りを覚えるとき、または挫折からくる憎しみに駆られるとき、こぶしを握りしめ、想像の中で敵に向かってそれを突き出し、呪いの言葉をつぶやき、憎しみと怒りの言葉をぶちまける。自分のものにならないつれない美女に恋い焦がれる者は幻想の中で彼女を見つめ、彼女に語りかけ、自分に何か頼んでくれるように懇願し、自分が彼女に受け入れられたように感じ、夢の中で彼女を自分の胸にかき抱く。期待と不安に駆られた漁師や猟師は、自分の想像の中で網にかかった魚の群れや槍で仕留めた動物の姿を見る。その名を呼び、言葉で大量の獲物の様子を詳しく描き出し、さらには自分が望んでいることを身振りで真似して表そうとまでする。[…](ibid., 79-80)

仇敵に痛手を負わせたい、美女を振り向かせたい、魚や動物をたくさん捕りたい。——これらは実現しなかったか、実現がきわめて困難に思える、私の「切望する目的 (desired end)」である (ibid., 79)。この目的の実現が阻まれると、私の即時的現出要求は空転する。私は目的の実現を諦めることができない。その結果、この「否定」の経験は、私をしてなりふり構わぬ「代償行為 (substitutue activity)」(ibid.) へと走らせることになる。代償行為とは、上の引用にあるように、望む結果を言葉で言い表したり、それを心ゆくまで想像したり、身振りで模倣したりする行為であるが、ここで重要なことは、「こうした暴発を操っているのは、目的にたいするイメージ」(ibid., 80) だということである。この「目的にたいするイメージ」は、空転する即時的現出要求の作り出すものにほかならない。

マリノフスキーによると、このように「目的にたいするイメージ」へと向かう代償行為——イメージを言葉で言い表したり、想像したり、身振りで模倣したりする行為——こそが呪術の正体である。本人にも制御できない仕方ではとぼしるこの代償行為は、「信じやすく教養のな

い心」にとっては、「非人格的な源」からやってくる「啓示」と感じられることがある。そしてその結果、この代償行為には、現実に変化をもたらす力があると信じられることがある。すると、たんなる個人的な代償行為だったものが、たとえば戦いに勝利したり、恋愛や狩猟を成功させたりするための「儀礼」として共同体の中で共有され、継承され、いわゆる呪術という営みになってゆくのだという (ibid., 81-3)。

さて、ここではもとより、呪術についてのこのような説明の当否を問題にすることはできない。しかし、ここでは仮にそれが真であるとしてみよう。すると代償行為としての呪術は、空転する即時的現出要求にその根がある、ということができる。

そして私の見るところ、技術もまた呪術と同じ根をもっている。

たとえばM. フリッシュの『ホモ・ファーベル』(1957)からの次の一節⁴⁾は、技術と呪術の同根性を物語っているだろう(これは、主人公ワルターとその前妻ハンナの会話の記録である)

ハンナとの議論——技術について。技術とは、(ハンナによれば)われわれがそれを体験しなくてもすむように、世界を整える策略(Kniff)である。技術者が被造物を執拗に実用物化しようとするのは、技術者が被造物と道を共にすることに耐えられず、それをもて余すからである。技術とは、抵抗物としての世界(Welt als Widerstand)を体験しなくてもすむように、それを排除する策略、たとえば速度でもってそれを希薄化する策略なのである。(Frisch, 2008, 285)

被造物こと自然は、たとえば厳しい冬の寒さを私に強いてくる。私はこの寒さを日々の暮らしから放逐したい。しかしそのためには、たとえば家の中に暖炉のようなものを作り、定期的に森へ行っては木を切り、薪を作り、それを運び、暖炉にくべ、火を起し、その後も火を絶やさないよう薪を補充する、といったことを行わねばならない。その間、暖かさにたいする私の即時的現出要求は延々と空転させられ続ける。私は暖かさを現れさせるまでの間、即時的現出要求に頑として応じない「抵抗物としての世界」を「体験」し続けなければならないのである。

これにたいして、たとえば暖房設備は、ひとたび適切に設置されれば、スイッチ一つで室内に継続的に暖かさを提供してくれる。暖房設備があれば、私は「抵抗物としての世界」をショートカットし、即時的現出に近い「速度」で暖かさを現れさせることができる。技術はこ

⁴⁾ この一節はNye (2007, 198) に教えられた。

のように、「抵抗物としての世界を体験しなくてもすむように、それを排除する」。そしてそれはいわば、「世界」によって空転させられた即時的現出要求による、「世界」にたいするリベンジなのである。

2. 全体としての存在者と存在要求の要求

このように、呪術と技術は空転する存在要求＝即時的現出要求という共通の根をもっているといえる。しかしその一方で、両者がきわめて異なるものであることもまたたしかである。そしてその違いは詮ずるところ、両者における存在要求の要求への応答の仕方の違いに存するように思われる。

本論のはじめに述べたように、存在要求の要求とは、私を逃れがたく存在要求者になっている、全体としての存在者からの要求である。そこで本節では、まずはハイデガーの1935年夏学期講義『形而上学入門』（以下『入門』講義）および1930年の講演「真理の本質について」（以下「真理」講演）に従って、全体としての存在者についての立ち入った解釈を行い（2.1、2.2節）、そのうえで存在要求の要求をより詳しく規定し、呪術と技術の違いを明確にする（2.3節）。

2.1 広義のピュシス

ふたたび幼児の例に即して考えよう。幼児が粉ミルクにありつけるのは、母親のお膳立てのおかげである。いいかえれば、母親が粉ミルクを前もっていわば既存物化してくれるからこそ、幼児はそれを自分のもとに現れさせることができるのである。この既存物化の過程を欠いている限り、幼児の存在要求は空転することになる。そしてこのことは、存在創始能力をもたないすべての人間の存在要求についていえることである。

ハイデガーは『入門』講義において、この既存物化の過程（と私の呼ぶもの）には大きく分けて三つのものがある、としている。

一つ目は、粉ミルクを作る過程のように、その過程全体が私自身の「知（Wissen）」（GA40, 19）によって導かれている場合である。何をどうしてゆけば粉ミルクはできあがるのか、という「知」なしには、そしてその「知」に従って私が実際に粉ミルクを生み出すことなしには、粉ミルクはけっして存在するようにならない。粉ミルクの既存物化の過程は、この「知」をもつ私の仕事なしにはけっして進展しない。ハイデガーは、このような過程を「テクネー」と呼んでいる。「テクネーとは、知りつつ生み出すこととしての生産、建設である（Die τέχνη ist Erzeugen, Erbauen, als wissendes Hervor-bringen）」（ibid.）。

二つ目は、そういった「知りつつ生み出すこと」を必要とせず、いわば自ずから既存物化するものがたどる過程である。たとえば粉ミルクの原料の一つである牛乳、つまり牛の乳は、搾

乳しようとする私にたいして、私のあずかり知らない過程を通じて、すでに既存物化している。人知れず進展するこのような過程を、ハイデガーはテクネーとは区別して「狭義のピュシス (φύσις im engeren Sinne)」と呼んでいる (ibid.)。

三つ目は、この狭義のピュシスとは似て非なる、広義のピュシス(「根源的により広く捉えられたピュシス (ursprünglich weiter begriffen[e] φύσις)」)である (ibid.)。ハイデガーが全体としての存在者と呼ぶのは、この広義のピュシスである。いわく、「全体としての存在者そのものが [広義の] ピュシスである (Das Seiende als solches im Ganzen ist φύσις)」(ibid.)。それゆえこの意味でのピュシスをいかに理解するかが問題となる。

なお以下では簡便のために、テクネーを通じて既存物化するもののことを人工物、狭義のピュシスを通じてそうなるものを自然物と呼び、両者を個物ないし個々の存在者などと総称することにする。

さて、この広義のピュシス、全体としての存在者は、自然物と同様、いわば人知れず既存物化している。しかし、たとえば牛乳の既存物化の過程(=狭義のピュシス)が原理的に観察可能であるのにたいして、全体としての存在者はそうではない。

たとえばバラの開花する過程は、自ずから、人知れず進展する。一方、全体としての存在者が存在するようになる「過程」も、もしもそのようなものがあるとすれば、この「バラの花が咲くこと (Aufgehen einer Rose)」(ibid., 16) と何ほどか似たものであるはずである。というのも、「全体としての存在者が存在している」という事態は、「バラの花が咲いている」という事態と同様、いわば「[自ずから、人知れず] 出来しては [そのまま消え去ることなく] とどまり続け、幅を利かせていること (aufgehend-verweilendes Walten)」、とでもいえる事態だからである (ibid.)。しかし、バラのつぼみのほころぶ過程が観察可能であるのにたいして、存在者が存在するようになる「過程」——つまり、「無」ではなく「存在」が成り立つようになった「過程」——はどこにも見いだすことはできない。そもそも、個々の人工物や自然物が、ではなく、もっとも広い意味での存在者が存在するようになっているのは、どういうわけなのかまったくわからない。そのような「過程」が仮にあるとしても、その内実は見当がつかないし、せいぜい「存在」という事態そのもののうちに畳み込まれ、秘匿されている、というほかない。そういう「存在」そのものもつ、ゆえんのわからなさ、人知を容れない秘匿性が、広義の「ピュシス」、「全体としての存在者」ということでハイデガーのいわんとすることには込められている。あるいは、ピュシス自身が「存在」とは何のことかをそれ自身のうちに秘匿しつつ全面的に体現しており、その意味ではそれは存在そのものである、とすらいえる。いわく、

このように出来し、それ自身へと自ずから出で立つことは (Dieses Aufgehen und In-sich-

aus-sich-Hinausstehen)、存在者において観察可能なさまざまな過程 (Vorgang) の一つと見なしてはならない。ピュシスとは存在そのものであり、それのおかげで存在者ははじめて観察可能 (beobachtbar) となり、また観察可能であり続けるのである。(ibid., 17)

以上が、『入門』講義における全体としての存在者の位置づけである。以下では「真理」講演をも適宜参照しつつ、これについてももう少し踏み込んだ解釈を行っておきたい。

2.2 一般的規定の継承という現象

全体としての存在者は、一つの存在者ではあるが、あれこれの存在者ではなく、むしろ存在者そのものという一般的なものであり、そこから現れてくる個物に存在者という身分を与えるものである。あるいは、個物は全体としての存在者から存在者という規定を継承する、といってもよい。個物が存在者という一般的なものとして現れてくるのは、それが全体としての存在者から存在者という規定を継承するからなのである。

この一般的規定の継承とここで呼びたい現象は、個物を現れさせようとする私の視点から見ると、次のように捉え直すことができる。

そもそも個物が一般的なものとして現れてくるためには、私自身が、前もって当該の一般的なものを求めて個物を現れさせようとしているのでなければならない。たとえば、幼児にたいして粉ミルクが「食べ物」や「空腹を満たしてくれるもの」という一般的なものとして現れてくるのは、幼児がもともと後者を求めているからである。だとすると、個物が「存在者」として私にたいして現れてくるのは、私自身がもともとこの「存在者」という一般的規定の体現者＝全体としての存在者を求めており、それを現れさせようとしているからだ、ということになるだろう。

しかし、たとえば母親のテクネーによって既存物化した粉ミルクは、幼児の存在要求にたいして紛れもなく存在者として現れてくるはずだが、そのとき幼児は、全体としての存在者を求めて、それを現れさせようなどしているだろうか。

「真理」講演のハイデガーは、これに「然りかつ否」と答えると思われる。

まず「否」の方から説明しよう。本論のはじめに述べたように、私にとって全体としての存在者は、個々の存在者がそこから現れてくる^{ところ}、一種の^場と化している。ハイデガーは「真理」講演で、この場のことを「開けた場 (Offenes)」と呼び、そこから現れてきうるもの——すなわちテクネーか狭義のピュシスを通じて既存物化しているもの——を総じて「現出可能物 (Offenbares)」と呼んでいる (cf., GA9, 185)。そして、この現出可能物を現れさせること——つまり本論でいうところの存在要求——を「存在させる働き (Seinlassen)」と呼び、それは同

時に全体としての存在者を「包み隠す働き (Verbergen)」でもあるのだ、と述べている。いわく、

個々の行動には、[個々の存在者を] 存在させる働きが含まれていて、この働きが当該行動にかかわる存在者を存在させ、そのことによってその存在者を現れさせるのだが、この働きはまさにそうすることによって、全体としての存在者を包み隠すのである。[個々の存在者を] 存在させる働きは、それ自身において、同時に [全体としての存在者を] 包み隠す働きでもあるのである (Das Seinlassen ist in sich zugleich ein Verbergen)。 (ibid., 193)

これに従うなら、幼児は粉ミルクにたいする存在要求を通じて、全体としての存在者を現れさせようとしているどころか、むしろ包み隠しているということになる。とすると、上の問いには「否」と答えねばならないだろう。

しかし事はそう単純ではない。ハイデガーはここでいう個々の存在者を存在させることを「自由 (Freiheit)」 (ibid., 188) と呼び (そう呼ぶ意図については本論では深入りできない)、この意味での「自由」を、「全体としての存在者をそうした一つの全体として現れさせることへと入り込まされていること (Eingelassenheit in die Entbergung des Seienden im Ganzen als einem solchen)」 (ibid., 192) と同一視してもいる。これに従うなら、幼児はやはり全体としての存在者を現れさせようとしている (=そのことに「入り込まされている」) ことになる。その限り、上の問いへの答えは「然り」となるだろう。

かくして、以上を考え合わせるならば、幼児は全体としての存在者を現れさせようとしつつ、それを包み隠している、といわねばならないことになる。

さて、これは一見矛盾しているようだが、そうではない。まずハイデガーによると、幼児は、そしてすべての人間は、まずはやはり、全体としての存在者を現れさせることへと「入り込まされている」。ただ、そのことを完遂していないだけである。というのも、「人間は、たしかにその行動の中で絶えず存在者とかかわりをもつが、しかし普通はつねに、あれこれの存在者とそのそのつどの現出可能性で満足している (es bei diesem oder jenem Seienden und seiner jeweiligen Offenbarkeit bewenden lassen)」 (ibid., 195) のだからである。いいかえれば、私はいわばつねに全体としての存在者を現れさせるよう差し向けられているのだが、実際には全体としての存在者を「開けた場」とし、この場を個々の存在者を現れさせることへと「明け渡す (freigeben)」 (ibid., 185) ことで事足れりとしているのである。その結果、全体としての存在者は、個々の存在者が現れてくると交替するようにその背後へと退き、そのものとしては包み隠され、「無規定的なもの、規定不可能なもの」 (ibid., 193) にとどまることになる。――か

くして、幼児は全体としての存在者を現れさせようとしつつ、それを包み隠している、という事態が成立するのである。

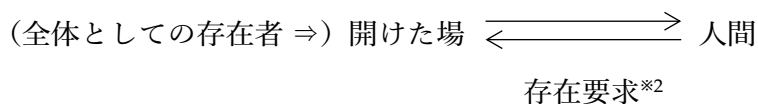
2.3 存在要求の要求

以上を踏まえて、存在要求の要求にかんして二点補足しておこう。

一点目。存在要求の要求とは、何よりもまず、**全体としての存在者からの、全体としての存在者を現れさせよ、という要求**である。ハイデガーは、この要求に正面から応えようとする事、とくに「全体としての存在者そのものとは何であるか (was das Seiende als solches im Ganzen sei)」を規定しようとする事が、「形而上学」を生んだと考えている (ibid., 198)。しかし上述したように、人間は「普通はつねに、あれこれの存在者とそのそのつどの現出可能性で満足している」。つまり人間は、この要求にたいしては、全体としての存在者を開けた場として明け渡し、そこから個々の存在者を必要に応じて現れさせることでよしとしているのである。しかし、包み隠された全体としての存在者は、開けた場の内奥から、この場に向かって存在要求をする人間にたいして、**自分の求めるものが何であるかを規定するよう要求してくる**。この意味で、存在要求の要求には、**存在者の本質規定の要求**も含まれているのである。

二点目。すでに見たように、すべての存在要求は存在者の即時的現出要求であるが、この要求は、現れさせるべきものが既存物化していなければ空転させられることになる。したがって存在要求とは、より正確に言えば存在者の**既存物化要求**である。ところで、既存物化の過程は大別すると狭義のピュシスとテクネーとに分けられるのだった。それゆえ狭義のピュシスによって既存物化していないものは、テクネーによって既存物化しなければならない。存在要求の要求は、このことをも要求してくる。つまりそれには、必要に応じた**既存物化の過程への参画要求**も含まれているのである。以上を簡単に図示しておこう。

存在要求の要求*1



*1 存在要求の要求は、本質規定の要求と、既存物化の過程への参画要求を含む。

*2 存在要求とは即時的現出要求であり、既存物化要求である。

ここから、呪術と技術の違いもまた明らかになる。両者は空転する即時的現出要求という共通の根をもっている。一方、呪術は技術とは異なり、テクネーによって既存物化すべきもの

を「代償行為」でもって既存物化しようとする。しかし代償行為は、既存物化の過程への参画を意味せず、むしろそれをショートカットしようとするものである。つまり、呪術は存在要求の要求（既存物化の過程への参画要求）に応ずることなく、自分の求めるものを現れさせようとする。これにたいして技術はあくまでそれに応じようとする。ここに、呪術と技術の違いがあるのである。

3. 現代技術の本質

ハイデガーは1953年の講演「技術への問い」において、「技術とは〔存在者を〕現れさせる一つのやり方である (Technik ist eine Weise des Entbergens)」(GA7, 14) と述べている。彼はそのような技術の例として、職人が銀を加工して皿を作ることや、家や船を建造することを挙げ、これらをテクネーと呼んでいる (ibid., 12, 14)。いわく、

テクネーは、自ずから既存物化⁵⁾することがなく [つまり狭義のピュシスによっては既存物化せず]、いまだ手もとにないもの (was sich nicht selber her-vor-bringen und noch nicht vorliegt) を [···] 現れさせる。[···] この現れさせることは、船なり家なりの見え方や材料を前もって取り集めておいて、それらが完成物となっている様を余すところなく看取したうえで [つまり『入門』講義でいう「知」をもったうえで]、それに基づいて製作の仕方を決定する。それゆえテクネーにおいて決定的なことは、作ることや操作すること、手段を利用することに存するのではなく、いま述べたような現れさせることに存するのである。製作することとして、ではなく、現れさせることとして、テクネーは既存物化の一種なのである (Als dieses [=Entbergen], nicht aber als Verfertigen, ist die τέχνη ein Her-vor-bringen)。 (ibid., 14)

ここでハイデガーは、テクネーは現れさせるからこそ既存物化させるのだ、と強調し、現れさせることに既存物化を従属させている。これは本論の言葉でいいかえるとこうなる。――テ

⁵⁾ 本論では、ハイデガーの用語 hervorbringen を、本論でいう既存物化と同じことを意味していると解する。それゆえ以下では論旨を明確にするために、この語を「既存物化」や「既存物化させる」などと訳すことにする。また、ハイデガーはこの語をしばしば her-vor-bringen のようにハイフンを挟んだ表記にしているが、本論ではその意図を推し量り、訳語に反映させるようなこともしない。労多くして功少なしと判断するためである。ちなみにこの語は関口訳の『技術への問い』(平凡社, 2013) では「こちらへとー前へとーもたらず」、森訳の『技術とは何だろうか』(講談社, 2019) では「こちらへと前にもたらして産み出す」と訳されている。

クネーとは、狭義のピュシスによって空転させられた即時的現出要求が——代償行為としての呪術に走ったりせずに——既存物化の過程に参画しようとするものである。つまりテクネーとは、本質的には即時的現出要求なのだが、それは呪術とは異なり、存在要求の要求を回避することなく、それに応じようとする事なのである。

さて、ハイデガーは、このテクネーとしての技術を「ポイエーシスという意味での既存物化 (Her-vor-bringen im Sinne der ποιήσις)」と呼び、「現代技術 (moderne Technik)」をこれとは質的に異なるものだとしている。彼は、「現代技術もまた一つの現れさせることである」としたうえで、次のように述べている。

現代技術の動向を至るところで左右している現れさせることは、いまやポイエーシスという意味での既存物化へとつながっていくことはない。現代技術において幅を利かせている現れさせることは、一種のそそのかすこと (ein Herausfordern) であり、それは自然にたいして、そのものとして発掘可能で、貯蔵可能であるような、エネルギーを提供するよう要求するのである。 (ibid., 15)

ここでハイデガーは、現れさせることと既存物化とを区別し、後者を前者に従属させたうえで、現代技術においては現れさせることが「一種のそそのかすこと」というかたちをとるようになったせいで、既存物化の仕方が「ポイエーシスという意味での既存物化」とは異なるものになってしまった、と述べている。テクネーと現代技術の間にはこのような質的相違があるというわけだが、それでは、それはより詳しくいってどのような相違なのだろうか。以下ではこのことも含めて、このような相違をもたらしているのが存在要求の要求、とりわけそれに含まれる——形而上学を生んだとされる——存在者の本質規定の要求であると論じ、本論の結論としたい。

それにあたり、まずは上の引用に続く記述を見てみよう。

しかし、このことは昔ながらの風車についてもいえるのではないか。いや、そうではない。風車の翼はたしかに風で回り、風の吹くのに直接身を任せている。しかし風車は、気流のエネルギーを貯蔵するために開発したりはしないのである。 (ibid.)

いま、この風車には回転軸と歯車と石臼がつながれていて、風車の翼が回ると石臼が回転して、結果的に小麦がひかれ、小麦粉ができるでしょう。この装置は、小麦粉の即時的現出を実現しようとするテクネーの所産であるということが出来る。しかし、肝心の風車が「風の吹く

のに直接身を任せている」以上、この装置は、風が風車の翼を回す方向と強さで吹いているときにしか仕事をしない。その限り、この装置は、利用者の即時的現出要求に応えるというよりは、それを空転させることの方が多いただろう。以下ではこのように、風や川の流れや動物などの自然物に仕事をさせることにより、何か別のものを既存物化させることを、便宜的に便乗的既存物化と呼ぶことにしよう。

この便乗的既存物化は、かつてガリレイが技術の役割として述べていたものである。彼はその初期の著作『レ・メカニケ』（1599 執筆）の中で次のように述べている。

[水を汲んだ] 手桶を引き上げて、それを適当な時にひっくり返して空にし、再びもとに戻して水を満たす、ということを動物は自分で考えて行うことができない。動物はただ力に十分恵まれているだけなのである。それゆえ、職工たるものは、それらの動力源に本来的に欠けているものを、道具によって補ってやる必要があるのである。その道具には、それを用いることによってわれわれが欲する結果を達成できるようにするために、それら動力源がただたんに力を発揮するだけですむように、工夫や発明が施されていなければならない。そして、まさしくこの点にこそ機械の最大の有用性が存在する。(ガリレイ, 1973, 218)

ここでガリレイは、動物や風や川などの「動力源がただたんに力を発揮するだけですむように、工夫や発明」を施すことが、技術の役割であると述べている。このように、動力源が「力を発揮する」のに便乗して、何か別のものの既存物化を果たそうとすることが、ここで便乗的既存物化と呼びたいものである。これはあくまで「便乗」なので、ここで利用される動力源は、いつでもどこでも仕事をしてくれるわけではないという点が重要である。

これにたいして、仕事をする能力、つまり各種のエネルギーそのものを発掘・貯蔵し、それにいつでもどこでも仕事をさせることができるとしたら、その技術はもはや便乗的既存物化とは呼べない。そしてそれこそが、先の引用から読み取れる、ハイデガーが現代技術と呼ぶものの新基軸である。以下ではこの新基軸を、便宜的に——「いつでもどこでも」という意味で——普遍的既存物化とも呼んでおくことにしよう。

したがって、ハイデガーのいうテクネーと現代技術の違いは、便乗的既存物化と主導的既存物化の違いに帰着するといえそうである⁶⁾。だとするとここでの問題は、何が前者から後者へ

⁶⁾ ハイデガー技術論にたいする代表的な批判の一つに、こうしたテクネーと現代技術の区別には十分な根拠がなく、両者の間には程度の差しかないというものがあるが、私はこの区別は実質的なものであると考える。この批判については、加藤（2003, 24ff.）、Verbeek（2005, 67ff.）を参照。

の移行をもたらしたのか、という一点に絞られることになる。

本来、この問題に取り組むうえでは歴史学的な調査が不可欠となるだろうが、ここではもちろんその余裕はないので、上の移行にとって重要だったと思われる一つの考察に焦点を絞りたい。それは、熱力学の父と呼ばれるサヂ・カルノーが1824年の著作『火の動力、および、この動力を発生させるに適した機関についての考察』で行った、熱の本性をめぐる考察である。

まずカルノーは、この著作の冒頭で、当時広まりつつあった、シリンダー内の蒸気を熱で膨張させてピストンを動かして仕事をする蒸気機関（あるいは火力機関）について、次のように述べている。

この機関は、はかりしれない重要性をもち、日に日に普及しているだけに、その研究はまことに興味ある課題である。[...] 火力機関はすでに、鉱山を採掘し、船を動かし、港や河をさらえ、鉄をきたえ、木を削り、穀物をひき、糸をつむぎ布を織り、きわめて重い積荷を運搬する等々のことをしている。火力機関はおそらくそのうちに、普遍的な原動機となり、畜力や水の落下や風力よりも好まれるようになるであろう。それは畜力にくらべて経済的だという長所をもつ。また水の落下や風力にくらべると、いつでもどこでも使用でき、けっして働きを中断しないという長所がある。(カルノー, 2020, 38)

しかしカルノーによると、当時「火力機関の理論はほんのわずかしが展開されておらず、機関を改良する試みは [...] ほとんど行きあたりばったりに行われて」いた (ibid., 41)。そこで彼が問題にするのは、熱の行いうる仕事には、熱という「事物の本性からくる限界」があるのかどうか、ということと、熱に効率的に仕事をさせるのに適した「作業物質」はあるのかどうか、ということである (ibid.)。ここでいう「作業物質」として従来採用されてきたのは水蒸気であるが、たとえば空気の方が適しているならそれを用いた方がよいというわけである。

さて、カルノーはこの問題に取り組み、最終的に、熱の仕事の効率は作業物質によらずに決まるという結論に達し、熱力学第二法則の基礎を築くことになった。しかし、ここではその議論の詳細には立ち入らず、むしろ次の点に注目したい。つまりカルノーは、火力機関を「普遍的な原動機」にするために、すなわちあらゆるところに熱を現れさせ、それに仕事をさせるために、当の熱そのものの「本性」について考察しなければならなかったのである。熱とはどのようなものかが不明であるうちは、火力機関の改良も「行きあたりばったり」にならざるをえない。しかし熱とは何であるかがひとたび規定されれば、火力機関をどのように設計すべきか筋道立てて考えることができるようになる。なるほど、このような思考自体は一種のテクネーである。しかしこのテクネーが、熱の本性についての考察に導かれたことにより、現代技

術への道が開かれたといっても過言ではないのである。

実際、今日、各種エネルギーの多くは発電所などで熱に仕事をさせるために用いられている以上、熱の理論が未発達のままであれば、いくらエネルギーを発掘・貯蔵したところで、その用途は限定的なものにとどまっていただろう。裏を返せば、熱の理論が整備されたことが、化石燃料、水力、原子力など、どんなものからもエネルギーを――それらが「ただたんに力を発揮するだけですむ」以上に――「そそのかす」という仕方で現れさせ、いつでも使えるように貯蔵しておく、という体制を作り上げたといえるのである。その結果が、可能な限り多くの即時的現出要求に応じるべく、エネルギーと仕事をさせるものを配備しておく普遍的既存物化という新基軸、あるいはハイデガーのいう「総かり立て体制 (Ge-stell)」であるだろう。

そして、人間は歴史を通じてこうした体制へと一步一步足を踏み入れてきたわけだが、その歩みを導いてきたのが、本論のいう存在要求の要求、とくにその本質規定の要求である、というのが本論の主張である。少なくともこの歩みを決定的に前進させたと考えられるカルノーの考察を導いたのは、全体としての存在者の方からやってくる、熱を現れさせたいならその本質を規定せよ、とでもいった要求であったとはいえるのではないだろうか。

いずれにせよ、ハイデガーが現代技術の本質を「総かり立て体制」と呼び、それは「人間を集め、その人間をして、現れてくるものを持ち場に立たせるべく引っ立てさせる、かのそそのかす要求 (Anspruch)」のことだといひ (GA7, 20)、さらに次のように述べている限り、その真意をとくと考えるならば、上のような結論が導かれるように思われるのである。⁷⁾

現れさせることが人間の作ったものではないとすれば、それはどこで、またいかにして生じるのだろうか。われわれは遠くまで探しに行く必要はない。必要なのは、人間をつねにすでに要求 (Anspruch) してしまっているかのものを、先入観なしに聞き取ることだけである。(ibid. 19)

文献

外国語文献からの引用にあたっては、邦訳がある文献は邦訳を参考にした。ハイデガーとフリッシュの文献からの引用は概ね拙訳により、それ以外の著作からの引用は概ね邦訳によった。

ハイデガー全集からの引用は、全集の略号 GA、巻数、頁数を記す。Gesamtausgabe, Vitto-

⁷⁾ ハイデガー技術論は本来、本論で扱った技術本質論と、「物」をめぐる考察という二本の柱をもつ。両者を包括的に扱いつつ、本論では立ち入ることのできなかつた技術にたいしてわれわれのとるべき態度まで踏み込んで論じている森 (2020) が、ハイデガー技術論の全体像を得るには好適である。

rio Klostermann, 1975ff.

その他の文献は次の通り。

Frisch, M. (2008). *Homo faber: Ein Bericht*, Suhrkamp. (1963, 中野孝次訳, 『アテネに死す』, 白水社)

ガリレイ, G. (1973). 「レ・メカニケ」, 豊田利幸編訳, 『世界の名著 21 ガリレオ』 (211-70 頁), 中央公論社.

カルノー, S. 著、広重徹訳 (2020). 『カルノー・熱機関の研究』, 新装版, みすず書房.

Izutsu, T. (2011). *The Collected Works of Toshihiko Izutsu Vol. 1. Language and Magic: Studies in the Magical Function of Speech*, Keio University Press. (2018, 安藤礼二監訳・小野純一訳, 『井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 言語と呪術』, 慶應義塾大学出版会.)

加藤尚武編 (2003). 『ハイデガーの技術論』, 理想社.

Malinowski, B. (1989). 'The Problem of Meaning in Primitive Language,' in C. K. Ogden & I. A. Richards, *The Meaning of Meaning* (pp. 296-336), A Harvest/HBJ Book. (2008, 石橋幸太郎訳, 『新装 意味の意味』, 新泉社.)

—— (1992). *Magic, Science and Religion and Other Essays*, Waveland Press, Inc. (1997, 宮武公夫・高橋巖根訳, 『呪術・科学・宗教・神話』, 人文書院.

森一郎 (2020). 『核時代のテクノロジー論』, 現代書館.

Nye, D. E. (2007). *Technology Matters: Questions to Live With*, The MIT Press.

Price, H. H. (1962). *Thinking and Experience*, Harvard University Press.

Verbeek, P. P. (2005). *What Things Do*, The Pennsylvania State University Press.